■受講生の傾向

近江環人地域再生学座は、自治体職員、民間企業、NPOや自治会に所属されている方、建築や都市計画の専門家など様々な所属、専門の方が受講しています。令和5年度末で172名の方が称号を獲得しました。年齢も20～70才代までと様々です。1年間(又は2年間)の授業では、大学院生と社会人が互いに刺激を受けながら共に学びます。

■Q＆A

Q：応募に必要な資格はありますか？

A：大学を卒業した方、もしくはそれと同等以上の学力があると認められた方で、①滋賀県内の自治体職員または関係団体職員の方、②滋賀県内の企業に勤める方、③滋賀県内の企業あるいはNPOに所属する方、④地域活動の実績を有する方のいずれかに該当する方で、「近江環人」の称号を取得し地域活動への参画に意志のある方です。詳しくは募集要項を参照してください。

Q：年齢制限はありますか？

A：ありません。ただし、実習等のプログラムを遂行できることが必要です。

Q：オンデマンド講義はどこで学習しても良いのですか？

A：講義配信とレポート提出の期日がありますので、その間であればいつでもどこでも何度でも繰り返し学習することができます。

Q：仕事の都合で授業を休んでしまった場合、補講などありますか？

A：座学の授業についてはオンデマンドを利用することができます。スクーリングは必ず出席いただきます。

Q：建築関係者ではありませんが受講できますか？

A：本プログラムは「まちづくり」の担い手を育成するプログラムであり、建築の専門知識を有しているかどうかは問いません。理系文系関係なくこれまでも多様な分野の方々が受講しています。

Q：受講料はいくらですか？

A：令和7年度は、入学検定料9,800円、入学料（県内者）28,200円（県外者）42,300円、授業料1単位につき7,400円(通常の授業料14,800円を半額に減免しています)で、県内者で必修・選択科目14単位すべてを受講した場合、合計141,600円でした。なお、授業料の額は令和6年度の額であり、改定されることがあります。**その他、不明点はお気軽にお問い合わせください。**

■大学院進学～更なるステップへ～

近江環人地域再生学座で修得した単位は、滋賀県立大学大学院の各研究科の定められた範囲内で履修単位として認められます。（最大１０単位）

この制度を利用し、本学大学院へ進学すれば履修期間を短縮することも可能です。これまで11名が大学院へ進学し、うち4名が短縮制度（1年間で修士号を取得）を活用しました。

■修了後のフォローアップ

平成23年1月、コミュニティ・アーキテクト（近江環人）の称号を得た修了生が中心となって、地域再生・まちづくりを支援するNPO法人コミュニティ・アーキテクトネットワーク（略称NPO法人環人ネット）が設立されました。同NPO法人では、会員のスキルアップ、後進・人材の育成、具体的な地域再生・まちづくり活動を実践しています。詳しくはインターネットで「環人ネット」と検索してください。

■お問い合わせ

公立大学法人滋賀県立大学　地域共生センター　近江環人地域再生学座　事務局
〒522-8533　滋賀県彦根市八坂町2500　　担当：鵜飼／上田／横大路
メール：kanjin@office.usp.ac.jp　電話：0749(28)9851　Fax：0749(28)0220

コミュニティ・アーキテクト 近江環人　Brush up Program for professional

※近江環人地域再生学座(社会人コース)は文部科学省　職業実践力育成プログラム(BP)【地方創生】認定講座です。

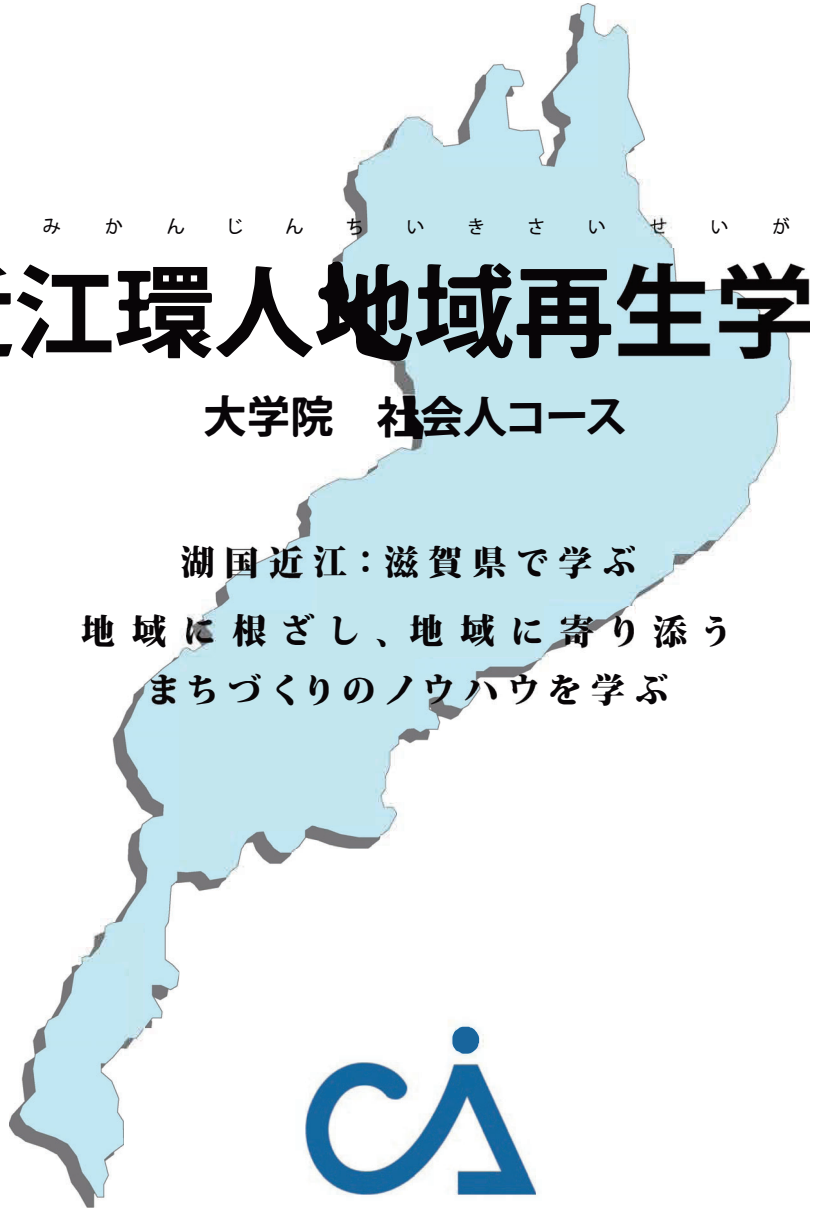
指定番号:2510005-1910011-4　開始日2025年4月11日　修了日2026年3月20日

※近江環人地域再生学座は一般財団法人滋賀県市町村職員互助会からの寄付を活用して運営しています。 2024/08

滋賀県立大学
THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

地域に根ざしたまちづくりの担い手：近江環人（コミュニティ・アーキテクト）育成プログラム
文部科学省　職業実践力育成プログラム（BP）【地方創生】認定講座

Brush up Program for professional



おうみかんじんちいきさいせいがくざ

近江環人地域再生学座

大学院　社会人コース

湖国近江：滋賀県で学ぶ

地域に根ざし、地域に寄り添う

まちづくりのノウハウを学ぶ

コミュニティ・アーキテクト
近江環人

近江環人地域再生学座の概要

● 新しい地域社会を切り拓く人材育成プログラム：18年間で172名を輩出

近江環人地域再生学座は、湖国近江をフィールドに、地域診断からまちづくり活動の実践まで、地域における多様な活動や挑戦のための知識・手法の教授を通じて、地域資源を活用した地域課題の解決や地域イノベーションを興し、**新しい地域社会を切り拓く、イノベーターやコーディネーター**：「**近江環人**（コミュニティ・アーキテクト）」を育成する講座です。2006年の開講から18年間で172名を超える人材を育成し、滋賀県内外で多くの近江環人が活躍しています。受講生は、民間企業、行政、NPO、自営業、大学院生など**多様な立場やスキルに、新たな知見や価値観を加え、スキルアップを図り、活動を進化**させていきます。

西粟倉村の現場講義。講師は近江環人の与語さん。

授業は、講義とディスカッションで構成。

● 大学院レベルの教育プログラム：大学院単位として認定

学座は、年間10名を定員とした少数精鋭のプログラムで、社会人受講生と現役大学院生が一緒に受講する**大学院に設置された教育プログラム**です。大学院生は各専攻の指定する単位数が認定され、社会人は科目等履修生としての受講となりますが、**取得した単位は、滋賀県立大学大学院に進学すれば各専攻で指定する単位数が認定**される仕組みです。この制度を利用すれば最短1年で大学院を修了することも可能です。これまで11名が大学院に進学しています。

● カリキュラム構成：1年間or2年間で10科目12単位履修

履修期間は、基本的に1年間での履修を想定していますが、各自の都合に合わせて、2年間での履修も選択可能です。カリキュラムは、前期5科目、後期5科目の必修科目、夏休み期間中の集中講義1科目の選択科目、計11科目14単位で構成されています。**社会人は必修の10科目12単位を取得し、検定試験に合格することで、称号「近江環人（コミュニティ・アーキテクト）」を大学が授与**します。大学院生の履修は「履修のてびき」を確認してください。

地域での実践的なフィールドワークへ参加も。

対面とオンラインのハイブリッド講義。

● 受講・学習方法：オンライン、オンデマンドで受講可能

授業は金曜日16時30分～と土日に開講されます（日程はスケジュール参照）。**対面、オンラインのいずれでも受講可能**です。**対面とオンラインを併用したハイブリッド型にも対応**しています。**欠席者はオンデマンドでの受講が可能**です。90分間の講義では、学びを深めるために、受講生との議論や、受講生同士の意見交換の時間を設けています。現場講義では、現場で講師の生の声に学びます。成績はネットで提出するレポートで採点されます（コミュニティ・プロジェクトⅠ、Ⅱのプレゼンテーションを除く）。

● 受講費用等：セット割引で半額。減免や補助制度も充実

本学大学院生は無料で、どの研究科に所属していても受講できます。社会人大学院生が受講する例もあります。

社会人は「科目等履修生」の料金：1単位14,800円が通常ですが、**学座はセット料金が適用され、この半額**1単位7,400円、必修10科目12単位で88,800円＋入学金（県内者28,200円、県外者42,300円）で合計117,000円～となります。（2024（令和6）年度入学の場合）　また、（一社）**滋賀県市町村職員互助会加盟の基礎自治体職員は受講料が全額免除**に、雇用保険を2年以上支払っている方は、厚生労働省の**専門実践教育訓練給付金制度の利用が可能で最大50％の給付金**を受けることができます。（1年コースのみ）　その他の費用としては、実践現場体感特別講義Ⅰ、Ⅱでの宿泊、食事費用が必要です。また、コミュニティ・プロジェクトⅠ、Ⅱでは、プロジェクトに必要な経費の補助制度も利用できます。

● カリキュラムマップと授業概要

スクーリングでのワークショップ

・各科目と身につける力の関連表

期	科目名 ＼ 身につける力	新しい知見	地域分析の手法	地域マネジメントの手法	講師とのネットワーク	企画力・実践力	単位数
前期	地域デザイン特論	○	◎				1
	地域マネジメント特論	○		◎		○	1
	成熟社会デザイン特論	◎			◎		2
	実践現場体感特別講義Ⅰ	○			◎		1
	コミュニテイ・プロジェクトⅠ	○	○	○		◎	1
後期	地域再生学特論	○		○	◎		1
	地域イノベーション特論	◎					1
	サスティナブルデザイン特論	◎			◎		2
	実践現場体感特別講義Ⅱ	○			◎		1
	コミュニテイ・プロジェクトⅡ	○	○	○		◎	1
夏休み	（選択科目）地域再生システム特論		○	◎		○	2
						計	14

地域デザイン特論　前期前半　1単位

地域デザインの基礎として、地域を知り、地域の特性を把握する手法「**地域診断法**」をマスターします。

地域マネジメント特論　前期後半　1単位

地域に入り込み、地域を動かすノウハウと、地域の持続性を生み出す**コミュニティ・ビジネス**の手法をマスターします。

成熟社会デザイン特論　前期　2単位

成熟社会をテーマに、看護学、社会学等の専門家教員によるオムニバス形式の講義で、**成熟社会に対する知見を深め**ます。

地域再生学特論　後期前半　1単位

様々な**地域再生の実践者をゲスト講師**として招き、実践のポイントを学びます。

地域イノベーション特論　後期後半　1単位

コミュニティやエネルギーをテーマに**社会変革を目指した取り組み事例**から、実践のためのポイントを学びます。

サスティナブルデザイン特論　後期　2単位

持続可能性をテーマに、近未来を予見しつつ、**社会のあるべき姿を議論**し、その実現のための方策について考えます。

実践現場体感特別講義Ⅰ、Ⅱ　前後期　各1単位

1泊2日で滋賀県内外の**先進的な取り組みを訪問し、現場の実践者を講師にそのノウハウを学びます**。実践者から多くの刺激と知見を得る機会となります。また、**受講生同士のつながりを育む機会**でもあります。

上勝町のいろどり農家さんへの訪問

西粟倉村のローカルベンチャーを視察

奈良の伝統野菜を味わいディスカッション

コミュニティ・プロジェクトⅠ、Ⅱ　前後期　各1単位

受講生の設定した課題に対して、ゼミナール形式で教員が指導を行います。課題解決の糸口や手法、メンタル的なアドバイスを受けることができます。また、ゼミ生同士の交流は、仲間意識を育み、切磋琢磨する機会となります。

検定試験

検定試験は、学習の成果を確認する試験です。小論文による筆記試験と面接試験で行われます。試験結果に基づいて、大学が称号「近江環人（コミュニティ・アーキテクト）」を授与するかどうか判定します。

コミュニティ・アーキテクト
近江環人

私にとっての近江環人

04 愛荘町役場 森野 直樹 【第13期生】

“ひと”が地域の貴重な資源 彼らの魅力を通じて持続可能な 地域社会の実現を目指す

地域で頑張るひととの出会いで、地域における自分の役割が見い出せた

「ひとの魅力を通じて愛荘町を面白いまちにしたい」スタイリッシュな見た目と素敵な笑顔が印象的な森野直樹さん。愛荘町役場の職員だ。

愛荘町で生まれ、高校卒業までを地元で過ごした。大学入学とともに地元を離れてからは、自身の故郷とその他の土地を比較する機会が多くなり、その中で滋賀県、そして愛荘町の魅力に気づいていったという。当初、愛荘町にＵターンを決め公務員として勤め始めた頃は、将来やりたいことをしていくための「つなぎ」という思いが強かった。しかし、滋賀でがんばる様々な方との出会いや、公務のやりがいと責任感が次第に大きくなり、縁の下の力持ちとして町と関わっていこうと考えるようになった。

愛荘町は平成18年の2町合併によって誕生した町で、その新しい町の「総合計画」に「まちじゅうミュージアム」の構想がある。町全体を美術館と見立てた、いわゆるエコミュージアムの概念。この計画も含め、まちづくりを財政面からも考えていきたいと思っている頃に、愛荘町と提携を結んでいる滋賀大学の大学院で学ぶ機会を得ることになる。2年間を通じ、他地域の事例や専門書などで成熟社会における持続可能なまちづくりについて考え続けた。「政策やプロジェクトを一過性のものとして終わらせず、持続的に地域を盛り上げていくための地域資源は「ひと」であると、自分なりの向かうべき道標を見つけることができた」。そう言う反面、それをどう実践していけばいいのかやり方はわからなかったと当時を振り返る。

伝統産業をもっと身近にする試みにも挑戦中

百聞は一見に如かず。五感で学ぶのが近江環人。

そんな時に出会ったのが近江環人。知り合いに面白いプログラムがあると教えられ、「コミュニティ・アーキテクト」という職能の考え方に共感した。「自分が実現したかったことの答えが見つけられるかもしれない」と思い立ってすぐに入学を決意。締め切りの直前だった。入学金と授業料は滋賀県の公務員を対象とした滋賀県市町村職員互助会の会員として免除されたが、金曜日午後の講義には有給休暇と代休をやりくりして出席している。まちづくりの事例を実践者から学んだり、まちづくりの方法論を座学で学ぶこと以上に、実際にフィールドに出て五感を通じて学ぶことが一番の魅力であり糧となる。今までは主観的にとらえていた地域を、様々な視点から客観的に見るための手法が得られ、愛荘町に足りなかったことも見えてきていると手応えを感じているという。

これまでの学びから“ひと”に地域資源としての価値を見い出した森野さんは、地域で頑張っている様々なひとや職能を、地域外の方はもちろん、特に地域住民に知ってもらい、地域内での消費需要や雇用の創造につなげていきたいと今後の展望を語ってくれた。

近江環人に行っていると、自信をもって言える

「近江環人は滋賀県の公務員が受けるべき」と森野さん。日常的に処理しなくてはいけない作業が多く、事務仕事は得意だが、その町を良くしたいという意識や、そうした意識があっても具体的に何をすればいいのかわからない公務員が多いと感じているという。

森野さん自身も、近江環人を通して、実際に地域に出て学び、滋賀に住んでいるという素晴らしさに気づく事ができたと話す。近江環人は「現場力」を鍛えるプログラム。地域での活動の仕方や愛着を持って地域と関わるきっかけが五感で学べる近江環人は公務員が地域に飛び出すきっかけを与えてくれる。「まちづくりはひとづくり」森野さんのまちづくりが始まった。

伝承工芸びんてまりを空間演出に利用したイベントも企画

私にとっての近江環人

01 今郷好日会 顧問 吉井 隆 【第10期生】

自分の居場所をつくること。それが私のまちづくり。

始まりは点。点をつなげてネットワークに

「簡単に言うと、良い友だちができたんです」吉井隆さんは、甲賀市水口町今郷での地域活動についてそう話す。近江環人がきっかけで所属することになった今郷集落の有志団体「今郷好日会」のメンバーとして、近江環人卒業後も今郷集落に通い地域活動を続けている。

吉井さんはもともと外資系企業に勤め商品開発を行っていた。“地域”について興味を持ち始めたきっかけは、趣味の場所づくりのために湖南市で古民家を購入したことだった。その土地は典型的な農村集落であったが、イメージしていた地元の人同士のコミュニティは希薄。特に若い人の人間関係は疎遠だった。

こうした現状に対し疑問を感じ、地域の事を知りたいとインターネットでキーワードを打って出てきたのが近江環人だった。地域のこともそうだが、世代の違う学生が今何を考えているのか知りたいという思いもあり入学を決めた。「近江環人はまちづくりの百科事典」と表現する吉井さん。そこで学ぶ多くの知識や手法としての「点」、それを地域で見つけたまちづくりの原点となる課題にどのように結びつけていくのか。そこから活動を広げていけるかはあくまで本人次第だという。

今郷集落と吉井さんの初めての出会いは近江環人の夏休みのプログラム「地域再生システム特論」のフィールドワークだった。旧東海道の整備と歴史資源の調査を目的に2010年に立ち上がった今郷好日会のメンバーが、地域課題を見つけ解決の方向性を探るフィールドワークの対象地域に手を挙げていた。事務局長の福野さんは当時を振り返り、「吉井さんをはじめ、ひとのつながりが生まれた事が一番の収穫だった」と語る。

休憩施設「郷の里」は吉井さんにとっての居場所になった

地域における大学の果たすべき役割を担う

近江環人を受講する社会人の中には、入学前から活動するフィールドを持っている方も多い。そうしたフィールドを持たなかった吉井さんは、フィールドワークによって生まれたつながりを深めていく事を目的として、近江環人での実習地域を今郷集落に決めた。そして、地域における自身の役割については、よそ者の視点を地域活動に加えること、大学のリソースとして地域に還元できるものを提供していくことだと考えたという。

そうした考えの上で自分が地域に関わり続け役割を果たすため、近江環人の卒業後は大学院に進学。修士課程を修了した現在は滋賀県立大学の特別研究員として、今郷集落で活動を続けている。「自分は仲人です」と言う一方で「今では、今郷好日会のメンバーとして、好きに意見を言わせてもらっている」と吉井さんは嬉しそうに話す。

ひとのつながりでできつつある持続可能なまちづくり

定年してから関わり始め、縁もゆかりもなかった今郷集落での地域活動も3年目になった。その間に、点として始めたいくつかのプロジェクトがつながったり、広がりを見せ、他地域、他団体との交流や、水口かんぴょうといった伝統作物の復活にも結びついた。地域活動を続けられる理由について、「自分のことを迎え入れてくれる仲間がいる。そんな居場所ができたから」と吉井さんが言えば、「吉井さんから学ぶことが多かったこともあるが、何よりも気が合うから」と好日会の福野さん。今郷では「ひと」と「ひと」のつながりによる新しいまちづくりのカタチができつつある。現在の課題は、団体として自立するための体制づくりと、継続していくための後継者育成だ。今後の今郷の活動に注目したい。

蕎麦の栽培など新しい企画も続々と進行中だ

変わっていくことを許容しつつも守るべき伝統を継承したい。

私にとっての近江環人

02 仰木自然文化庭園構想 八王寺組

穴風 光恵 【第 11 期生】

仰木の地との出会い “地蔵プロジェクト”

「仰木の“地蔵プロジェクト”の調査結果を形にするのを手伝って欲しい」。当時の成安造形大学情報メディアセンター長から、センター職員の穴風光恵さんを含む現在のコアメンバーに声がかかったのは2001年の事だった。

滋賀県大津市北部の丘陵地の棚田に囲まれるように位置する集落「仰木」。そこに点在する約1000体の地蔵の調査から始まった地蔵プロジェクトだが、現在は穴風さんなど5人のコアメンバーが、地域の方と深く関わりながら、仰木の文化・伝承、風景の変容などを記録している。古来からの日本の美意識や里山の共同体精神のあり方を探り、活動の中で得た情報や文化資源を造形・視覚的表現として昇華させ、新しい価値観の提示を試みる活動に展開している。

暮らしと農業が一体となった仰木の棚田景観

具体的には、お地蔵さんのトレーディングカードを作成し子どもたちへ配布したり、地蔵盆に合わせた参加型のイベントの企画、仰木の環境を俯瞰的に見るための立体地図の作成などに携わってきた。「地域の人から聞ける色んな話が面白くって」活動は継続して10年以上になる。

しかし、そうした言葉とは裏腹に、昔は当たり前だったことが消えていくこと、伝えるべき文化や技が継承されないということに危惧を覚えるようになったという。よそ者である自分らしい関わり方でもっと仰木と深く関わりたい。いつしかそんな気持ちが生まれていた。

地域における 自分の役割を見い出し始めた

2007年に大きな転機が訪れることになる。数年に渡る地蔵プロジェクトの活動の実績が評価され、地元農家の有志団体「仰木自然文化庭園構想 八王寺組」から声がかかり、発足メンバーに加わった。八王寺組は農業後継者対策、農地保全、地域活性化を目的とした団体で、穴風さんは特に、農業に関わる文化や技の記録と継承、大学組織や都市住民などとの連携体制の形成を提案。具体的には棚田保全のためのボランティアの受け入れや、棚田オーナー制による耕作放棄地の活用と関係者が集える拠点づくりを行っている。

コミュニティビジネスとしての まちづくりへ

しかし、7年に渡る活動の中で、高齢化が進み参加が困難になる方が出てきたりと、継続的に活動を行っていくためにはメンバーの思いだけでは続いていかない現実に直面することになる。

「活動を長く続けるための仕組みづくりが学びたかった」近江環人に入る動機には十分だったと穴風さん。入学の目的は、棚田保全の方法と地域内外の交流の活性化が目的だったが、自然エネルギー利用をはじめ、地域資源に付加価値を見出しそれをどのように活用していくことができるのかなど、近江環人では地域を見る様々な視点を養うことができたという。

また、他地域の事例の成功談、失敗談からはまちづくりにおけるビジネスの視点の重要性を認識するようになる。そうした学びから、地域の課題解決を通じて収益を生み出していく事業スキームや八王寺組に足りなかった所が見えてきた。

近江環人では地域を活性化するために必要な地域資源を見極め活用していくための目と、専門性や対象とする地域は違っても、同じ思いを持った仲間ができたという穴風さん。近江環人卒業後、棚田保全を通した地域活性化をテーマに、持続可能なコミュニティビジネスの事業スキームを検討していくことを目的として、滋賀 県立大学の大学院へ進学した。「仰木の棚田をはじめてみた時の感動が忘れられない」恩師に連れられて見た仰木の姿、そしてそれを残していきたいという思いが、よそ者である穴風さんを動かす原動力になっている。

地元住民と地域外のボランティアのつなぎ手に

私にとっての近江環人

03 木村建築研究室

木村 真理子 【第 13 期生】

ニュータウン開発を機会に安土らしい暮らしをカタチにする

設計士として住環境整備から まちづくりにアプローチしていく

「これまでの設計やまちづくりの経験を安土の修景に活かしたい」木村真理子さんは、東京都町田市で個人住宅を中心に手がける設計士だ。その中でも木村さんが拠点とする地域は「まちづくり」が盛んな町。そうした環境の中で、個別の住宅などの設計によって「点」でできる住環境整備には限界があることを感じ、「面」として住環境を整えていく重要性に気付き始め、建築に関わる領域で地域活動を15年近く行ってきた。宅地開発におけるガイドラインを冊子にまとめるなど、積極的に地域での活動に関わっている。

一方で、安土とは結婚を機に関わりが生まれた。「10年に一度開発の話が出る」そのたびに行われる画一的な宅地開発で、安土らしい景観が失われていくことに危機感を感じていた。東京での生活もあるため、具体的なアクションを起こせないでいたが、たまたままちづくりについて調べ物をしている時に、近江環人を知ることになる。研究機関としての大学が、地域に溶け込み、地域で活躍できる人材を育成するプログラムはまだ珍しい頃だった。これから必要になるだろう近江環人のコンセプトに強い興味を持った木村さんだったが、当時は毎週滋賀に通うことはできないと断念していた。

安土の集落を継承した懐かしく、 でも新しい、そんな開発を目指して

それから数年の後、再び安土での開発の話が飛び込んできた。「計画地は安土を象徴するような場所。この開発への提案を通じて、安土全体のイメージアップとその後の地域の修景のケーススタディにできれば」。そうした思いで近江環人への入学に踏み切った。

しかし、町田での住環境整備の経験が安土でも活かせると感じていた一方で、町田で築いてきた、専門領域を超えて一緒に都市計画や開発をしていくためのネットワークが滋賀にはなかった。近江環人に入った大きな理由は、都市計画におけるアドバイスをもらうことのできる先生の存在や、今後一緒に活動していける人脈づくりだった。

今回の開発の計画地の側には昔の開発による町の姿も。

地域を「診る」目を養うのが近江環人 その思いを形にするのはライフワーク

入学後は近江環人で大学に通う傍ら、開発会社との調整を進めた。約3ヘクタールの土地の買い上げとその後の画一的な区画割りに対し、安土の集落らしい里道を意識した歩行者通路や水路など、歩く事が楽しくなるイメージを描く。開発もさることながら、その後の販促のイメージも重要だと木村さん。先進的な宅地開発の事例である近江八幡市の「小舟木エコ村」の担当者とつながり、販促の仕組みづくりから行政との付き合い方までアドバイスを受けた。「“安い”、“駅から近い”を謳うのではなく、その土地での暮らしが、豊かさにつながるということをイメージできる開発にしたい」。近江環人の卒業までに、区画割りやデザインコードの提案などをまとめるが、卒業後も関わり続けるための布石も打ちつつ、その後の地域への普及までの展開も見据えている。

安土らしい水路と街路のある風景

設計士として、住宅の敷地やその周囲の環境や地形を見ることは基本だったが、近江環人によって広い範囲での地形や気候、その土地の歴史的背景、文化や伝統とそれらの変容といった、その土地の織りなす「環境」を俯瞰的に見る必要性に気づいたという木村さん。「それが直接仕事やデザインに影響するかは、また別の話。だけどそれが面白い」。

環境だけでなくそこで暮らす人も様々な思いを持ってそこにいる。「一人で一つのことをがんばってもできることは限られる。意見を押し付けるのではなく、みんなで意識を共有していきながら安土らしい開発にしていきたい。」2015年2月に実習の成果が報告される。